

健康文化

ターミナルケア—患者との出会い—

安藤 詳子

ターミナルケア(terminal care)は、通常、終末期のケアと訳されていますが、ターミナルという言葉の意味をどう捉えるかによって多少異なった解釈もあるようです。私は、若輩ながら今までの経験からターミナルケアとは「最期の時を共に生きる」ことであると、今のところ考えています。私がそのように考えるようになった経緯をここで振り返る機会とさせていただきます。

私がターミナルケアに興味をもち始めたのは、約15年ほど前でした。その頃、私は病院の外科系病棟に看護婦として勤務していましたが、寺本松野氏の『看護のなかの死』を読んだり、講演を聴く機会にも恵まれました。この本は、看護婦である寺本氏自身の体験が率直に表現されており、当時、多くの看護婦に対して死をみつめる看護実践への勇気を与えたものと思います。私は、その後、患者さんや家族の方々と出会い、さまざまな場面を経験してきました。

自分の記憶をたどっていきますと、いろいろな人のことを思い出しますが、時を遡りその果てに脳裏に浮かんだのは、矢沢幸という詩集『光る砂漠』の作者でした。この詩集と出会ったのは、私がまだ看護婦になる以前の中学生の頃でした。作者矢沢君は、7才の時にはすでに病魔に(腎結核)に冒され、8才の時には右腎臓摘出術を受けていました。結核でも充分予防・早期発見・治療し得なかった当時、21才の若さでこの世を去った彼は、闘病生活の中で青春を過ごしながら心の思いを詩に表現しました。人が生まれ人として生きていこうという時に、自分ではどうすることもできない病気という大きな力に威圧され病苦に悩む人の気持ちについて考えさせられました。矢沢君の詩を全て紹介したいほどですが、彼が16歳のときに作った詩を2編掲載させていただきます。

本当に

本当になって 話をきいてくれると
そのうれしさに 目のまわりがあつくなる
でもその人に はずかしいから ぐっところえると
ひざが ガクガクしてきて 体がふっと浮きそうだ

五月の詩

僕は、燃えがらではない、
一つのベッドをあたえられて 悲しみながら じっとがまんしているんだ、
「ちょっと今晴れているか、空を見てくれ」
人間ていう奴を 考えれば考えるほど不思議に思える。
その不思議の深さを 本当にはっきり見た人が 死んで行くのだろうか。
花は花として見たい
草は草として見たい
かわいい女の子を そうと手の平に乗せて
いつまでもいつまでも 見ているような気持ちになりたい、
そんな気持ちになるよう がんばろう！

この詩集と出会ったときの私は中学生で、私自身が自己に目覚める多感な時期を過ごしていたので、この詩集から過大なインパクトを受けたかもしれませんが、ターミナルケアとは「最期の時を共に生きる」ことであると私が考える発端は、そもそもここにあるような気もします。但し、この時は想像上のことであり、現実感を伴っていませんでした。しかし、実際に看護婦になって臨死場面に遭遇するようになってから、患者さんと接するとき、矢沢君が詩に込めた思いを目の前の患者さんの気持ちの中に感じられることが多くありました。

私が最期を共にした患者さんの多くは、悪性腫瘍や白血病等の癌疾患に罹患していました。私は、11年間臨床の看護婦として勤務した中で最後に体験したある青年との臨死場面は特に忘れることができません。

彼は、MDS（骨髄異形成症候群）と診断され末期を迎えていました。その日、深夜勤務だった私は、血小板減少による出血傾向が悪化して瀕死の状態だった彼を見守る母親の疲労を気遣い、代りにそれまで母親が座っていた椅子に腰掛けました。眠れない彼は力の無い細い声で「お母さんは？……お父さんは？……弟は？……おじいちゃんは？……おばあちゃんは？……」と聴き、私はその度に応え、しばらくの間、彼は必ずその順番で聴き、同じ会話を5、6回繰り返しました。

彼はなかなか眠る様子はなく、すると突然今までとは少し違う口調で「何か話そうか」と言ったのです。声に張りが出て元気な明るい響きでした。私は、彼が話したい内容が解りませんでした。私は、彼がずっと病室で過ごしていて外を見ていないことを思いつき、「外は桜が咲き始めたのよ」と桜の話をしまし

た。彼はそれには応えず、全く違った話題にしました。「学生のと看、何してた？」と聴かれ、私は部活のことかと思いい「ウーン、バレーボールとか……」と応えろと「僕は野球一本」ときっぱりと言いました。「フーン、どこ守ってたの？」と興味深く聴く私に、彼は「いいとこ……、ピッチャーだったんだ」と得意そうです。私は思わす「ワーすごいね」と応えました。他のことも楽しくおしゃべりしましたが、私は、あまりにすらすらと話す彼の鮮明な記憶としっかりした口調に驚きながら、ふと血液の性状や脳の流れ状態と脳組織の活動が、何か理屈に合わなような不思議を感じました。そして、私たちがとても穏やかな時間を過ごしていると実感していました。

途中彼が「頭が痛い」と訴え、私は頭蓋内出血を心配したのですが、すぐ脈に触れると緊張は良く血圧も普通だったので、当直医に上申するのはやめました。そうして“考えてみれば、もしかしたら頭蓋内出血が進行し呼吸抑制が起こり、今にも逝ってしまうかもしれない彼と、どうしてこんな穏やかな時間を過ごせるのか”と私は半信半疑の気持ちでした。

彼は会話の途中から、右の手で左の上肢を持ち上げようとしていました。左の上腕部は以前に内出血し腫脹していたため、とても痛くて動かないはずの腕でした。それにもかかわろす、彼は、なぜか右手で左上腕から肘そして手と支え持ち上げて、両手を前で組んでは降ろし、目を閉じてその動作を何回か繰り返しました。私は“何をしてるのかな？”と思いつつ「痛いでしょ」と言いながら彼の左上腕を支えていました。

深夜の2時から4時頃までのことでした。私は、深夜業務のため朝の準備を始め、その後日勤の看護婦に彼の状況を引き継ぎました。

その日、彼は両手を前で組んでは降ろす動作を繰り返し、時には、手拭を投げたのでした。腕を持ち上げたのはピッチャーのポーズだったので。私はそのことを知って、“それが解ってれば、何とかしてボールを持たせてあげたかった、彼はどんなにかうれしかっただろうに”と思いい、同時にそのことに気づけなかつた自分が情けなく感じました。彼は、その夕方に意識が低下し、その夜、昇天していきました。

数日後に、私は本学に転入してきましたが、この時の体験を自分としてどう解釈できるのか、大変気がかりでした。そして、看護の現場を離れ、今度は教育を担う立場になったものの、自分の実践してきた看護の実際を文章にできないのでは、自分の経験を生かして看護を教えることはできないと思いいました。そして、看護系や心理系の文献を読み、それらを参考にして、この時の体験を次のように解釈しました。

私が彼と過ごした穏やかな時の流れには、二つの空間がある。一つは、病室のベッドに横になっている彼・そのベッドの横の椅子に腰掛けている私・ソファに横になっている母親がいて、彼と私は普段のおしゃべりのような会話を交わし、それを聴いていた母親がいるという現実的で具体的な空間である。そして、もう一つは、彼自身が、死を直前にした不安と苦痛の現実を越えて、彼の人生で最も輝いていた過去の時間を生きていたという創造的で抽象的空間である。始めに彼と私と母親が具体的に存在した空間があり、それから会話を交わした時の流れのなかで、彼は抽象的空間に入っていく。

彼の人生にとって、家族と野球部のピッチャーとして活躍した自分が最も価値のあるものだったのかもしれませんが。ある著者は、「(人は) かつて活躍した姿を思い出すことによって、自分が意味のある存在であったことを認めることができる」と記し、ターミナルケアについて「患者が自分がこの世に生まれて良かったこと、自分の人生は意味のあるものであったとしみじみ振り返ることができるような、そういった時間が持てるように手伝えればよいと思う」と述べています。

私がこの体験から学んだことは、ターミナルケアとは正に「患者と共に生きる」こと、すなわち「患者を支える看護者は、その時その場にあって、できる限り患者の安楽をはかり、その人にとって何が最も大切かを患者や家族と一緒に考え、患者と一緒に死を見つめ、今生かされているこの時の流れを慈しみ、その空間を共感し合う」ということでした。

(名古屋大学医療技術短期大学部助手・看護学科)